昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第二十七巻　第十一号
（通巻第三一七号）

目次

善悪摂取……近角常観……(1)
祖聖親鸞……福島政雄……(8)
慈母の念力(一)……高千穂徹乗……(12)
念仏詩抄……木村無相……(16)
不断煩悩得涅槃……花田正夫……(19)
ともしび……聚墨生……(22)

善悪攝取

近角常観

大体親鸞聖人の真宗なるものは、書物の上、文字の上の真宗でもなく、又法門の真宗でもない、聖人の心中に如来の真実を味わわれたその妙味が真宗である。そこで聖人の著書を読むにも普通の書を読むつもりで読むとその味を失う。聖人の著書は文字のみを読まずに、その文字の上に顕（あらわ）れた仏陀真実の御恵みを読ませて頂かねばならぬ。然るに従来この有難い書をば難渋なもの、乾燥無味なものの如くに思うものが少くない。しかる故は鎌倉時代の実際の味から書いた有難い信仰の書を、秩序的律法的の徳川時代になって訓詁的（くんこてき）註解的に読み去ったから、充分にその真味が出て来なかったのである。此書の如き信仰の書は強ち（あなが）に解釈を要せぬ、ただ聖人の実験を味わわせて頂くのが大切である。

今日まで話して来た「教行信証」は、親鸞聖人の内心上の味であって、これが人生の実際にあらわれたのが、二種回向の真味である。聖人は唯一の南無阿弥陀仏のお恵みを以て、かつてこの大なる恵みを知らぬところの人生の実際に切り込んで種々に導いて下された、これが聖人の一生である。ここで教、行、信、証、真仏土（しんぶつど）の五巻は絶対他力の信仰を正面からあらわし、化土巻（けどかん）になって、隔ての多い、計らいの多い人生に立ち入って、自己信仰の味をもって種々に批判を下してある。換言すると聖人の一代における実験的信仰の人生的経過がこの化土巻に著しく顕れている。

そもそもこの「教行信証」は開巻第一、

ひそかにおもんみれば難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり

と、先ず仏陀のお恵みの広大なることを歎美し、次に、

然れば則ち浄邦縁熟して調達（ちょうだつ）闍世（じゃせ）をして逆害を興ぜしめ浄業機彰（あらわ）れて釈迦章提をして安養を選ばしめ給えり

と、この人生上に仏の恵みの顕われ来られた事実を出し

てある。この事実は云うまでもない観経に示されたものである。然しこの経は、表面に定散（じょうさん）九品を説いて、自力の分別を以て種々に計らうものを、遂には仏智不思議の計らいのないところに入らしめてある。そこでこの経の真意を信仰の眼をもって見るときは、提婆、阿闍世の如き全く仏陀の大なる恵みを露ほども知らずに妄念の催すままにみだりにこの人生の事を計らって、自業自縛して苦悶して居る者を初めとして、其他一切の善を修し功徳を積みながら、自力作善に苦しんでいるもの等、いずれも自力の計らいをたくましゆうしている者が、遂にはそれが縁となって絶対不可思議のお恵みによって助かることを人生上の事実によって実験されたのが観経であると云わねばならぬ。

次にまた「阿弥陀経」は念仏一つを辿って居るものを、終に絶対の信仰に入らしめることを示して、この絶対他力の道は釈尊がこの人間世界に於て説くばかりでなく、広く十方世界に通じて諸仏のひとしく説き勧めるところであると示されたものである。

要約すれば、この観経、阿弥陀経は、共に表面には方便仮門（けもん）を説いてあるが、終局のところは逆悪不善、悪邪無信のものも、廻り廻って終には仏の恵みに救われることを示されたものである。本来五濁悪邪無信の輩は、この絶対他力の恵みによってのみ救わるべく、絶対他力の救済はこの濁悪邪見の徒のために顕れたに外ならぬのである。そこで

斯（こ）れすなわち権化（ごんげ）の仁、ひとしく苦悩の群萌を救済し世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。と云うてある。

この事実は千古万古その規を一にしている。近くは法然上人親鸞聖人の事蹟についてこれを見るに、法然上人は我日本国において念仏一宗を興隆して盛に一切善悪の者の往生の道を開いて下されたが、晩年に及んで念仏停止の令下り、あまつさえ上人の門徒弟子数輩を死罪流罪に処せられた。聖人はまたその一人である。かく両聖人を迫害する非常な出来事により益々広大な仏の恵みが現れて来たのである。

そもそも何故に世人がこの様に法然上人等を悪く思うたかというに、上人が聖道門を抛（なげう）ち万善諸行を捨て、唯念仏の一法のみ当今末法における出離の要道なりと大喝せられたからである。この上人を弾劾（だんがい）した反対の人達はみな悪人かと云うに、栂尾（とがのお）の明恵上人の如き高僧方を首として南都北嶺の人が法然上人の立義を痛く憤慨せられたのである。

そこで権実真仮の問題が中心である。法然上人の信仰は

聖道門八万四千の法門では何れの門を以てしても涅槃には行けぬ、唯念仏一つのみ仏果に到るべき道であると説かれたのである。南都北嶺の諸寺の釈門ならびに世俗の儒者などに至るまで、当時の一般の思想界はこの上人の信仰をば味えずして彼は僻説を唱えて高尚な顕密の教法を斥け、北嶺南都を蔑視するもので、正統の仏教を破滅する悪魔であると憤慨したのである。法然上人の立場は、世の中に真の恵みは南無阿弥陀仏一つであるというに、他の反対の人々は、自ら心を清くし行を修めて仏果に行かんとする立場である。このように異なる立場から上人を疑い、上人に反対し、果ては迫害を加えたのである。その水火の中に立ちて念仏一門を宣説し給う事実は、これをさかのぼれば観経の上で、釈尊が、提婆、阿闍世の迫害の中に、広く仏の恵みを説き、阿弥陀経の上では、五濁悪邪無信の熾盛な間に、念仏を説くと其の轍（てつ）を同じうする。法然上人の弟子住蓮房が

五濁増時疑謗多し、道俗相見て聞くを用いず
修行有るを見て瞋毒（しんどく）を起し方便破壊（はえ）し競って怨を生ず

の文をば、死罪を行われる前に朗々と高唱して捕えられたのはもっとものことである、よりて教行信証の跋文には

ひそかにおもんみれば聖道の諸教は行証久しく廃（すた）れ、浄土の真宗は証道今盛んなり、然るに諸寺の釈門、教にくらく真仮の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷うて邪正の道路をわきまうることなし

と断言せられた。これは単に筆端を弄したのではない、信仰の熱血のほとばしったのである。故に次に事実を叙し

これを以て興福寺の学徒、太上天皇、今上、聖暦承元丁の卯の歳仲春上旬の候に奏達す。主上臣下法に背き義に違し、忿（いかり）を成し怨（うらみ）を結ぶ。これによりて真宗興隆の大祖源空法師、並に門徒数輩、罪科を考えずみだりがわしく死罪に坐す。或は僧の儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す、予は其一なり。

この様な迫害の中で、身は砕くとも唯念仏一つを持って変ることのないのが両聖人の信仰である。拾遺古徳伝に、法然上人配所に趣き給う事情を叙する中に、

承元元年三月上旬の頃、聖人すでに配所に趣きましますべきなりければ、月輪の禅定殿下の御沙汰として、法性寺の小御堂にわたし奉り逗留をなしき。三月十六日都を出で給う、すでに進発のとき、卒爾をかえりみず、一人の門弟に対して、一向専念の義をのべ給う。お弟子西阿推参して曰く、この如きの義しかるべからず覚え侍べりと。聖人のたまわく、汝経釈を見ずやと

西阿申して云く、経釈はしかりといえども世間の機嫌を存ずるばかりなりと。聖人またのたまわく、我たとい死刑に行わるとも更に変ずべからずと云い、その気色もとも熾盛なり。見たてまつる諸人、涙を流し随喜せずということなし。

というてある。法然上人の念仏はただ口で称えたのでない、身を以て説いて下された有難い念仏である。それ程有難い絶対の大悲を知らずして、自性唯心に沈んで浄土の真証を貶（けな）したり、或は親しく絶対他力の教文に遇いながら矢張り定散の自心に迷うて元の律法主義に陥ったりするものの多いのは実に憐むべく又慨くべきことである。

常に云う如く、所謂逆悪の凡夫を捨て給わぬ仏陀の恵みは、罪の重いから助からぬのでなく、善根の多いから勝るのでもない、よって法然上人は

本願の念仏には助をささぬなり、助さす程の念仏は極楽の辺地に生る。

と断定せられた。上代は一代の間このように明快に本願の念仏を説かれたのにかかわらず、上人自身は持戒清浄にして、円頓大戒をも捨てずに居られたから、ただ外部から見た者は上人の信仰の真味を取ることが出来なかったのもやむを得ぬことである。或人が上人に「持戒して念仏するのと破戒にて念仏するのと其功徳は同じとは如何」と。上人答えて曰く「持戒破戒というは戒ありての上の事なり。例えば畳あるところにこそ破れたると破れぬとあるが如し今の我等は無戒なり、如何でか破と持とを沙汰すべけん。かくの如き無戒の比丘も此念仏のみにて往生するは本願の約束にてあるなり」と、かように懇ろに教えられても、なお世人はそうば云うものの、この念仏は無戒などで称えては功徳が少からうという自心の計らいが止み難い。これで親鸞聖人は断然在家の行儀をもって妻子を持ち、此人生の上に於て汚れた無戒名字の比丘として、身をもって本願の念仏を立証せられたのである。

聖人が当時在家の生活を断行せられたのは、実に非常なことである。当時の律法主義の仏法者の目には、如何に異様に映じたであろう。現今でも東京などでは一般の人の思想からは、真宗は頗る異である。破格であると思われている。甚だしい人は邪見とまでも思われている。今日これ程に他力の信仰の盛んな時代でさえ、このようなのだから、聖人在世の状態は想像せられることである。さてそのように思うのは何故かと云うに、其人自身は在家とはことなって立派な、清いものであると思うて、絶対不可思議の仏の恵みを見ないからである。親鸞聖人は化身土巻に、伝教大師の末法灯明記を引いて、末世のものの持戒の出来ぬ浅間しい有様をくわしく示された。其中に曰く、

将来の世に於て法滅尽（めつじん）せんと欲せんとき、まさに比丘比丘尼ありて我法の中に於て出家を得たらんもの、己れが手に子の臂をひき、而して共に遊行して彼の酒家より酒家に至らん。

等とまでいうてある。これは末世は実にこの如き有様であると示す一面においては聖人が自らひどい懺悔をせられたのである。自分の方に懺悔していると共に一方には末世においては真の比丘無ければ「名字の僧衆をもまさに礼敬せんこと舎利弗目連の如くすべし」と論じられたのである。

なお聖人の和讃を窺うと、矢張りこの「教行信証」と同一轍に出ている。浄土和讃、高僧和讃の二帖は仏経と論釈とを本として、正面から仏智不思議を讃歎し、正像末和讃に至ってはその名の様に、先ず正像末法の三時にわたっての仏法の興廃について述べ、次にこの時を思わず、機を省みずに出離を求めようとする者は、仏智不思議に入る能わずして、疑惑にととこおるものなることを述べ、かかる人の多い中に、我如きは何の幸ぞ他力不思議の信仰に入ることを得たとは、これ全く還相大士の聖徳法皇の恵みによるということから、皇太子奉讃を作り、最後に及んで悲歎述懐の和讃十六首を列ねて、一面からは自己の浅間しいことを歎き、一面からは真の恵みを知らぬ外道的仏教を悲しまれた。その述懐の有様にいたっては、自他の区別を見る暇もなく、自己の内心といい当時一般の仏教の有様と云い、いかにも浅間しいことであると悲歎せられた。聖人当時の仏教界の有様は真実に仏法を喜ぶものは稀れであって、自然に色々の祈祷、加持等現世の禍福を左右せんとするようなことを専らとして、外儀（げぎ）は仏法の姿でありながら内心の実際は皆外道に走っている有様であった。この中に立って聖人は外面に強ちに賢善精進の相を現ずること勿れ、水垢離をとり苦行を修しても精進潔斉の殊勝如法な相を現じてもつまりは駄目である。念仏して速に西方に往生するにしかずと、凛然として法然上人の信仰を伝えられた。もうここに至っては真仮の区別ぐらいでなしに、真偽を勘決（かんけつ）して邪偽異執を教誡せねばならぬことになってきた。そこで化土巻末のはじめに、先ず涅槃経の「仏に帰依せんものは終にまた更にその余の諸天神に帰依せざれ」とある文、及び般舟三昧経の、

優婆夷（ウバイ）この三昧を聞いて学ばんと欲する者は、自ら仏に帰命し、法に帰命し、比丘僧に帰命せよ余道に事（つか）うることを得ざれ、天を拝することを得ざれ鬼神を祠ることを得ざれ、吉良日を見ることを得ざれ

という文を引用して、真の仏教は三宝帰依の外なく、其余は皆外道であると断じ去るに至った。見去り見来れば、

正像末和讃はこれ全く仮名書きの化身土巻である。

要するに親鸞聖人が自ら悲歎せられたる他の半面においては、唯々仏の恵み一つを喜ばれたのである。此仏の恵み一つを喜べば身を清めることもいらず、心を静めることもせずに、而も求めもしないのに天神地祇は此の念仏者を護持養育し、日月星辰も常に照覧擁護を与えて下さる。一家の中も広い世界も、天の星も地の文も皆仏の恵みの外はない、この様な広大の御恵みを知らずに両聖人を流罪に処するに至ったのは、まことに憐むべきことである。常の人ならば罪なくして配所の月を眺めることであるから、如何ばかり無罪を訴え人を怨むのであろうのに聖人は、

大師聖人（源空）もし流刑に処せられたまわずば我また配所に趣かんや。もし我配所に趣かずんば何によりてか辺鄙（へんぴ）の群類を化せん。これなお師教の恩致なり

というて喜ばれた。色々の出来事がますます仏智不思議の広大なことを現して下さる方便であると深く信じ給う聖人にとっては、何れに向うても敵というはなく、一方の人の疑謗迫害はいよいよ仏教の信頼すべきを示すためであり、我等師弟を遠流に処せしは、遠方辺鄙の地にまでこの真の恵みを伝えんがためである。皆これ広大なる仏陀の慈悲の計らいである。今我れこの如き広大の恵みに入ることを得たのは、ひとえにこれ仏教の恩致である。たとい法然上人にすかされまいらせて、地獄に落ちたりとも更に後悔なしと、師教を全く信じて、真の恵みの広大なることを喜ばれた。よりて「教行信証」の跋文に左の事実を挙げた次いで、直に師資（しし）相承の因縁を自ら叙して曰く、

然るに愚禿釈鸞、建仁辛酉の暦、雑行を捨てて本願に帰す、元久乙丑の歳、恩恕を蒙って選択本願念仏集を書き、同じき年の初夏仲旬第四日に選択本願念仏集の内題の字、並に南無阿弥陀仏、往生之業念仏為本と、釈の綽空の字とを、空の真筆を以て之を書かしめ給いき。同日、空の真影申し預りて図書し奉る。同二年閏七月下旬第九日、真影の銘は真筆を以て、南無阿弥陀仏と、若我成仏十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正覚、彼仏今現在成仏、当知本誓重願不虚、衆生称念必得往生の真文とを書かしめ給う。

其師資親密の状態見るべきである。親鸞聖人が二十九歳の春より三十五歳の春まで、法然上人に親炙して聞かれたのは、唯この重願不虚、称念往生の一義である。親鸞聖人「選択集」を見ること深くして「教行信証」一部全くこの選択集の要義を述べられたばかりである。次に「選択集」を讃歎せられて、

選択本願念仏集は、禅定博陸（月輪殿兼実法名円照）

の教命によって選集せしむるところなり。真宗の簡要念仏の奥儀ここに摂在せり。見るものさとり易し。誠にこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり。

歎美まことに至れり尽くせりである。これはそのまま移して私共が「教行信証」を歎美する語としてよい。

聖人はこの様に師教の恩厚を蒙り、深く如来の矜衷を喜んで、慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重く、黙止すること能わずして自らまた筆を取りて真宗の悪義を列ねられることとなった。もとより名利のためでなく、唯仏恩の深いことを喜ぶの余りに出たことであるから、信順を因とし疑謗を縁とす、疑うものは疑え、謗るものをして謗らしめよ何れも縁になって共に遂には広大の恵みに入ることであろう。かくして前に生れた者は後を導き、後に生れる者は前を訪ね、連続無窮にして休息すること無くば、いかに無辺の生死海といえども終には尽きること〻もなろう。とにかく末代の僧も俗も、この仏智不思議を敬信すべしと云い、最後に華厳経の偈文を引かれて

若し菩薩種々の行を修するを見て、善不善の心を起すことありとも菩薩みな摂取せん

と結ばれている。この様に聖人一代の間、無限絶対の大慈悲を喜ばれて、聖道、権仮、定散自力の人のみならず、一切善悪の者すべてと共に、この無限大悲を喜ぼうとせられたのである。

開講から七日間、甚だ蕪雑の至りながら、とにかく現今私が心中に味って喜ばして頂くところを、この「教行信証」の上に喜ばして頂きました。一向秩序も立たず、まことに慚愧の至りであるが、自己の信仰、即ち涅槃の真味、仏教の真髄を忌憚なく発表させて頂きまことに感謝に堪えません。私は御当地に来てこのように仏陀の恵みを喜ばせて頂くこと正に五年、人生何時、どんな事が出来せぬとも限りません、ことにまた仏教界の様子も大いに奮起せねばならぬ気運に来ていると考えます。大いに仏力の顕われんとするときは、世界の潮流が著しくなって来て、必ずや大なる出来事によって一層速かに仏陀の御光を撃発するに至りましょう。自然そういう場合には諸君にも真剣に尽して頂かねばなりません。

終り

（明治四十一年出版、親鸞聖人の信仰）

祖聖親鸞

福島政雄

一

親鸞聖人という名を私が始めて聞き知ったのは、大学の学生時代であって、ほとんど嘘とおもわれるほどにおそかった。親しい友人がその父君の一週忌に当る日に、三四人の友達を集めて晩餐を共にし、記念として多田鼎師の「恩寵の宗教」という小冊子を皆に施本として頒ったことがある。この本を私が感激をもって繰返して読んで、これで私は初めて聖人を内面的に知り始めた。

それは聖人に対する美しい感じに満ちた小冊子で、恩寵の渦巻の中に人生を観じ、われらは恩寵の囲園の中に生活すると説かれてある。その文章と思想と情調と相待って私を感激させたこの小冊子を多田師はのちに絶版にしてしまわれたけれども、私としてはこれによって聖人への親しみの端を開かれたのであった。

大学卒業の前の頃、佐々木月樵師の親鸞聖人伝を読んだ。これが私が聖人に親しむ第二の縁となった。然しこの頃までの私は浪漫的情緒ばかりに支配せられているという有様であったから、勿論聖人の深い信仰に触れるという境地にはまだ遠いものであった。それで大学卒業直前の私の心持は、日蓮聖人、キリスト、親鸞聖人三つ巴をめぐっているという有様であった。

卒業後も旧約聖書の中の予言者イザヤとかエレミヤとかを読んで感じたりして、もしも自分に宗教の信仰というものがわかる時がくるとしたら、キリスト教に入るであろうと考えていた。それが不思議の縁で仏教の浄土真宗の信仰を私の胸に開かれるようになったのは実に有難いことと思うのである。

それには友の縁というものが大切なものとなっている。「恩寵の宗教」を施本した友人は、近角常観先生の求道学舎のことを私に話して、一度先生のお話を聴聞するようにとしきりに勧めてくれた。然し私はなかなかその気が起らなかった。ところが私の二十六歳の春、人生問題に苦悩し

ていた叔母を案内して求道学舎にまいったことがご縁となって、その春から夏の始めにかけて私は度々学舎に参って先生のお話を聞いた。

その最初に聴聞したお話は唯仏是真という題であった。すなわち聖徳太子の晩年に時折側近の方にお洩しになったという世間虚仮、唯仏是真というお言葉を題とせられたのであって、後に思いあわすと誠に不思議の因縁であると思う。このように私は聞法の最初から太子と聖人とのお心を聞くという因縁になっていたのである。

その当時私も心に小さい煩悶を持っていた。それは学校における教育愛の問題と家庭における親子の心情の融和理解という問題であった。これを焦点として、その六月の頃には近角先生の「人生と信仰」という著書を読んでよほど感ずるところがあった。こうして生活と読書が触れあうことになって、これから私はよほど切実な求道という心を起し始めた。二河白道の譬喩を先生のご講話で聴聞していた私は、その時、まさに水火二河の河畔に立ったのである。私は重い心で深く沈んでいた。

二

法華経や日蓮聖人御遺文や聖書などが、この時私の心のたよりにならなかったのは、それらを浪漫的、文学的感激をもって読んでいたからであると思う。その七月の初めに私は求道学舎の夏期求道会において、教行信証の信巻の阿闍世王入信文を人生問題そのものとして魂の底までしみ透らされた。聖人に関する著作や聖人のご述作について私が生きた求道の読書をするようになったのはこの時以後のことである。

阿闍世王入信文はその時以後私にとって偉大なる感激の文となった。阿闍世とは一切の五逆を造るものなり、という一句は、私がすなわち阿闍世であるという自覚を喚起した。阿闍世が身心の悩みに倒れたのを沈黙裡に看護する母后韋提希の姿はすなわち私の煩悶を憂慮するわが母の姿であった。その生きた母親のいのちの縁の上において、すでに「阿闍世王のために涅槃に入らず」という仏陀の大悲を感じた阿闍世の姿は、当時親心に逆らい始めていた私自身の姿であった。私もまた母のいのちを縁として久遠の親心に摂受せられたのである。

阿闍世に父王頻婆沙羅の声が空中から聞こえて来るという心の体験は私には久しくわからなかったが、しかし父を失ってのちに始めてわかるようになった。それは迷倒の心の底にひびく親の声である。父母を勝縁として信心の胸を開かれるということ、光明名号の父母という味わい、これらはすでて阿闍世王入信文を出立点として永年の間に私が次第に会得してきたことである。

生きながら地獄に堕ちることに非常な恐怖を感じていた阿闍世がひとたび世尊の大悲の親心に照徹せらるるや、無量劫にわたって阿鼻地獄の火に苦しんでもこれを苦としないという心持に転じてくるところなど、久遠の親心を身に受けて、人生苦悩の中に安住する境地を遺憾なく闡明したものであり、私が二十六歳の夏の心機転換後、今日にいたるまで三十年の歳月を通じて次第に深く味わわしめられているところである。

如来は一切のために、つねに慈父母となりたまえり
まさに知るべし諸の衆生はみなこれ如来の子なり
世尊大慈悲、衆のために苦行を修したまう
人の鬼魅にくるわされて狂乱して所為多きが如し

この阿闍世王の信心開発の語は、この時以来私の心肝に銘ぜられている。而して涅槃経のこの心はすなわちわが聖人の身に受けたまえる仏心である。私はこの時以来これをわが身の上に受けている。

大無量寿経を中心の正依として、右に華厳経を味わい、左に涅槃経に心を入れ、華厳の明朗に心晴れ、涅槃の慈悲に心のおちつきを得られているわが聖人の心持が私にも次第にわかって来たように思う。

阿闍世王入信文に、最初の心魂の徹底を得た私は「誠に知んぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずに入ることをよろこばず、真証の証に近づくことをたのしまず、恥ずべし痛むべし」という聖人の述懐に無限の共鳴を感じた。その感激はながくつづいている。

三

聖人の信仰に私の心胸を開かれてのち、私には歎異抄の中心の問題が一度にわかるようになった。心機転換の当時から、最も深く心にしみるようになった歎異抄の文句は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」という一節と「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」という一節とであった。私はここに私一人を目指しての大悲を感じ、世間虚仮、唯仏是真という聖徳太子のお言葉の信仰上の味わいを会得した。そのうちながい間の様々の人生体験を通して歎異抄の味わいは少しづつ次第に深く私の身にしみて来た。最初の間は、第一章の「他の善も要にあらず」とか「悪をもおそるべからず」とか、第二章の「地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」とか、第七章の「念仏者は無碍の一道なり」とか、第十三章の「たとえばひとを千人ころしてんや」とかいう、水際立ったところに感激していたが、のちには感激の場

所がさらに静かに深い心持の文にまで及び、第九章の「念仏申し候えども」とか、第十六章の「信心さだまりなば、往生は弥陀にはからわれまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず」とかいう箇所に、しみじみとした味わいを得るようになった。

読書には心読ということがある。しかし歎異抄のようなのを読むのは身読というのが本当の読み方であろう、身に体して読むのである。身心徹到、いのちの奥にしみじみと読むのである。人生体験の上からわが身の上に受けるのである。

人生の無常に遭逢するということは歎異抄のような聖教を身読する上の無上の縁となる。私は子を失い、妹を失い、母を失い、父を失って、悲歎の情綿々として尽きず、ことに母の死ということについては、そののち五年経っても十年経っても、どうしても諦めることができなかった。佐々木月樵師はその著「相憐むの記」の中に、迷情上の真像ということを述べておられるけれども、実に私は迷情の綿々として尽きないところにおいて仏陀の真像を感ずる。母を失って母なき人生に母を求めるという迷情が私にながく続いた時、藤村の迷情の記ともいうべき「新生」を読んでかえってそこに心の開けるご縁を得て、お念仏に立ちかえったことなどを回想すれば、歎異抄の第九章とか第十六章とかは、私のような者の心の終局に落着くところでないかと思われる。

近角先生は、歎異抄にはところどころに名所があると仰言いました。それは第二章、第七章、第十三章などの水際立ったところを意味せられたもののようであったが、先生ご自身も、その名所には落着きたまわずして、むしろ平凡とも見られる第九章に最後の落着きを得られたようである。

盧山の戦いに先生のご長男が戦死せられてのちの先生の心境は正しくそれであった。私がお目にかかるごとに「どうしても歎異抄の九章である、長男のことはあきらめることは出来ない」と仰言った。それは私にとって有難いことであった。先生が凡夫の迷情を示されつつ仏陀の大悲に摂せられて、その晩年を過ごしたまい、ついに昭和十六年十二月三日、凡夫そのままの静かな往生をとげられたことは、歎異抄第九章のお味わいを最後にいたるまでおん身の上に示されたものとして深い思いをもって仰ぎ奉るのである。

「読書と教養」　続く

慈母の念力（一）

——亡母の三十三回忌を迎えて——

高千穂徹乗

○

今年の十月の二十八日は、私の母の三十三回忌にあたります。母は二十六歳の春、主人（私の父）に死にわかれ、八歳の私をかしらに、五歳と三歳と一歳との四人の子どもを残されました。両親はおらず縁者もすくなく、女のかよわい手一つで、御門徒の協力をうけて仏厳寺の本堂と庫裡を改築し、清貧の中に四人の子どもを、きびしく育てあげました。その四人の子どもは、今もみな元気でおります。

私の父は三十五歳で、この世を去りましたが、私は小学校の四年生になったばかりでした。私が父のことを思うとき、いつもうかんでくる悲しい思い出があります。それは父がなくなる数日前のことだろうと思いますが、父は私を病床のまくらべによんで、私に阿弥陀経を読むようにと申しました。私はそこにあった湯のみ茶わんをたたきながら、そのころ習いおぼえた阿弥陀経を読みました。そのとき父はニッコリ笑って、私に褒美の品をくれました。おぼつかなくお経をよんでいる私の声を聞きながら、父はおさない四人の子どもが、しあわせに成長してくれることを念じていたことでしょう。私はこのときの父の心をしのぶごとに、いたいほど私の胸をふさぐ情念にひたるのでした。それからの長い私の学究生活において、私は亡き父が、いつも私の歩いてゆくすがたを、見守っているように感じて、はげまされ、ちからずけられたのであります。

私は中学を卒業すると、京都の仏教大学（竜谷大学の前身）に入学し、十年の研修のあと、つづいて京都に住んで教職をつとめました。私は春と夏の休みと、御正忌（ごしょうき）と春秋の彼岸会に帰るだけでしたので、弟の橘哲夫が、宇土市の正栄寺に入寺するまで、母をたすけて法務をつとめてくれました。

それで母は六十二歳で死去するまで、三十六年のあい

だ、お寺を守り、御門徒との法縁をふかめ、多くの法友の相談にのりながら、ぐちひとついわず、明るくほがらかに生きぬいたのであります。

○

しぶいとこ母が食ひけり山の柿

これは俳人一茶の句であります。私が京都の寄宿舎にいたころ、毎年、秋のなかばになると、母からの小包がついて、寺の庭に出来た柿の実を送ってくれました。私はその柿の実をたべながら、しみじみと母のことを思わずにはいられませんでした。柿の実のひとつひとつに母のまごころがこめられているように思われたからであります。長いあいだ郷里をはなれて、自分自身の道ばかりを歩いてきた私は、ともすれば母や郷里のことをわすれがちであるのに、いつも旅にある子のことを、案じつづけている母のことを思うと、みずからをあわれむ心にたえられないとともに、わが身のしあわせを感謝せずにはいられませんでした。

子のために　靴下のやぶれ　つくろはん
いとまある日の　うれしき母ごころ

これは柳原白蓮さんの若いころの歌であります。このごろは、子どもの服を編んだり、くつしたの破れをつくろうことなど、あまりいたしませんが、むかしは多くの母親たちがお縁に腰をかけて、太陽のひざしを浴びながら、子供の服を編んだり、くつしたの破れをつくろっているすがたをよく見かけました

私が京都の学校にいたころには、母がいそがしい仕事のあいまに、縫いなおした着物を小包にして季節のかわりめに送ってくれました。私はその着物のしつけの糸を取りながら、そのひとすじの糸のなかにも、母のいのちが流れているように思われて、いただかずにはいられませんでした。

この子ひとりを正しく生かさずにはおかぬという母親の念力ほど、強くとうといものはありません。子どもたちは、高価な着物でかざられるよりも、母親の手によって洗濯された服を着て、母の手によって作られた御飯をたべて、大きくなることが、どれほど恵まれた幸福でありましょうか。

○

さきの大平洋戦争や日中事変などで、戦死された人たちの数は、まことにおびただしいもので、それぞれ老いた父母をのこし、妻や愛児をのこして、死んで行かれた人たちの、尊いお命とお心をしのぶ時、私は胸のいたむ思いがいたします。

しかるに私たちは、いつのまにか、そのようなことをわすれ、ぜいたくに慣れ、わがままや不足不平ばかりいって

暮しております。まことに恥ずかしいことでございます。終戦後三十年をすぎて、私たちは、いちどきびしく自分を反省し、命をささげて守ってくださった祖国を、私は誠実にまもりつづけているのか、戦死された人たちに顔むけのできる日ぐらしを私はしているのか、深く考えてみなければなりません。

去る昭和十二年に熊本県菊地市出身の立山英夫という方が、日中事変永定河の作戦で戦死をされたのです。その遺品である軍服の内ポケットから、英夫さんが最後まで肌身はなさず抱いていた母親トヨさんの写真が発見され、その裏に小さな字で、ぎっしりと母を思う歌が記されていました。そのお母さんの写真のうらに記された歌は、次のようなものであります。

もし子の遠くへ行くあらば、帰りてその顔見るまでは
出でても入りても子を念ず、おのれ生あるそのうちは
子の身にかわらんこと思い、おのれ死にゆくその後は
子の身を守らんこと願う、あああありがたき母の恩
子はいかにして報ゆべき、あわれ地上に数知らぬ
衆生のなかに唯一人、母とかしずき母とよぶ
尊きえにし伏しおがむ、母死にたもうそのきわに
泣きて念ずる声あらば、生きませる時なぐさめの
ことばかわして、ほほえめよ、母息たゆるそのきわに
泣きておろがむ手のあらば、生きませる時、肩にあて
まごころこめて、もみまつれ
おかあさん　おかあさん
おかあさん　おかあさん

この最後の「おかあさん」という文字はくりかえしくりかえし、小さな字で二十四回も記されて、読むものの胸をうつのです。いつ死ぬかわからない戦場、そしてかねてたよりにしていたものが、何ひとつ役にたたない戦場において、塹壕のなかで月の光をたよりに、母の写真をながめた時、立山英夫のまぶたのうらに、はるか遠い故郷の空の下で、いつもいつも、この私ひとりのことを念じつづけていてくださるお母さんのすがたがうかび胸のなかに、その親心が入りみちてきたことでありましょう。

きのうも今日も、次々と戦友がなくなってゆく、かねてたのみにしてきた学問も権力も、なにひとつとして役に立たない。孤独と不安のただなかに、静かに「おかあさん」と呼んでみると、もはや少しの不安もなく、さびしさもない。明るく力強い世界がひらけてくるのでした。

○

もし子の遠くへ行くあらば、帰りてその顔見るまでは
出でても入りても子を念ず。
おろおろと、居ても立ってもおれない親心が、そのまま歌

われています。私たちが朝夕に拝んでいる仏様は、お立ちずくめのお姿といわれております。子は親のことを忘れずめでありますが、親は子のことを思いずめであります。この親のすがたと心のように、仏さまは私のことを思いずめにして、じっとしておれなくて、お立ちずくめであります。

私たちはおろかにして、心がまがれるために、尊い御法を求めることさえ知らないので仏さまは求められないのに、こちらから求めて友となり、願われないのに、自分からねがって尊い教を説きしめし、大衆の苦しみを自分一人でにないながら、自分をいたわるよりも、もっと強くやさしく、すべての人のことを念じ、すべてのなやめるものと共に泣きたもうのであります。山口県の川棚にいられた井上月仙師は、自分のよろこびを、次のように歌っていられます。

御礼する時も、心はとびにげて、わたしや地獄のたねをまきずめ

まきずめる地獄のたねでおちる身を、弥陀は助くるために立ちずめ

立ちずめの御姿みても、わたくしは御恩報謝のこころこけずめ

こけずめる心を弥陀はあわれみて、よるひるあきもせずにだきずめ

だきずめのお慈悲を、わたしや聞くときも、心はうわのそらになりずめ

なりずめの心もやはり御承知で、そのままこいの弥陀のよびずめ

ゲエテの言葉

他人からよい忠告をうけてそれを用いる人は自分で気がついたのと同じである。

人格の修養をするからとて、いつもいつも潔白な道徳的なものばかり求めているのはよろしくない。すべて偉大なものは一切のものからよき教をくみとるものである。

或る人を賞讃することはとりもなおさず自分をその人と同列に置くことになる。

遠い考えのある人は一日をよく用いることを知る

常に現在を離れてはいけない。各々の瞬間は永遠というものの面影である。したがって無限の価値がある。

一番はじめの穴をかけ違えたら何時までも終りのボタンのかたがつかない。

念仏詩抄

木村無相

聞く(一)

香樹院師仰せに
〃聞くというは
坐を占めて聞く
ばかりにあらず
呼びづめのお声を
聞きづめにせよと
なり〃

呼びづめのお声
ナムアミダブツ
称えるときも
お呼びづめ
称えぬときも
お呼びづめ
十劫のむかしから
お呼びづめ
寸時もはなれず
お呼びづめ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

聞く(二)

香樹院師仰せに
〃聞くとは
寝ても覚めても
お助けの仰せを
思うのが
聞くのじゃ〃

お助けの仰せ
ナムアミダブツ

ねてもさめても
仰せづめ
思いづめ
わたしにつきづめ
仰せづめ
思いづめ
思われづめの
わたしとは——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

聞く (三)

香樹院仰せに
〃名号のイワレ
聞けよ　聞けよ
仰せらるるが
ただちに御廻向の
大信心じゃ〃

聞けよの仰せが
そのイワレ
聞けよの仰せが

おん廻向
聞けよの仰せが
大信心
聞いた心が
信心じゃない
ナムアミダブツが
その仰せ
ナムアミダブツが
大信心

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

聞く (四)

香樹院師仰せに
〃聞くのが
もらうのじゃ〃

聞くのが
もらうのじゃ
聞いてから
もらうのじゃない
聞くといえども

聞こえたもうの
お聞かせが
聞こえたもうの
ナムアミダブツと
聞こえたもうの
わたしの聞いたに
用はない
聞こえのまンまが
もらうのじゃ
ナムアミダブツは
聞こえの法

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

常念仏は

常念仏は
如来さま
〃常於大衆中
説法師子吼〃
常に呼ばわせ
たもうなり

わたしの
貪瞋煩悩の
ただ中で
常に呼ばわせ
たまうなり
ナンマンダブツ
ナンマンダブツと
常に呼ばわせ
たもうなり
常念仏は
如来さま
常に呼ばわせ
たもうなり
ナンマンダブツ
ナンマンダブツ

○

口あいて五蔵見らるる
アクビかな

○

つぎつぎと逝く人ありて
夏去りぬ

不断煩悩得涅槃

花田正夫

京都の西陣でつずれ錦が造られる。表に花鳥等の模様がある立派な絹の織物であるが、裏は糸屑ばかりで見られたものではない。さて煩悩具足、煩悩熾盛の凡夫が業報のままにたどる信心の旅はこれと同じである。あらゆる煩悩のボロで一杯の身が、そのすべてを弥陀仏の摂取の御手におさめられて、称名報恩の錦の模様が織り出されてゆくのである。

広島の篤信者がいつも「見てござる、見てござる」とつぶやきながら行商をしていた。その人の内心を推察するに、人が見ていないと品物を多少でも誤間かしたい心がつい浮かんで来る。それにつけても人が見ていなくても、仏様が見てござるぞと、自分が自分に言いきかせながら、脱線する心を慚愧しつつ念仏にひきもどされひきもどされしてたどった信の旅であろう。

又私の信友でもう亡くなったけれど鳥取で住職をしていた故・辛川忠雄さんが次のような打ち明け話をしてくれた、

「鳥取の源左同行は僕の寺から余り遠くないところに住んでいた。

農閑期になると行商をかねてよく出かけてきたので、有縁の人々が集って仏徳讃仰をするのが例になっていた。寺にもそうした時に顔を見せてくれた。或夏、母が腸チブスになって入院したので、不馴れな家事や台所仕事までをせねばならぬのでホトホト困りはてていた時、ヒョッコリ源左同行が顔を見せた。そこで何かと手伝いをたのんだ。そして一仕事片付くと、履物をふところに入れて裏戸からこっそりと帰って行こうとするので、呼びとめると、非常にこまったような何とも云えぬ顔をして逃げるようにして出て行った。その時は非常に腹が立ったが、あとで聞くと、源左同行が来ると常宿をしてくれた村の有力者から、辛川の寺に行くな、伝染病はこわいからのう、もし行ったら今年は家へ来るなときびしく言わ

れていたが、寺に挨拶に行かぬとすまぬと思っておそるおそる来たのに、私が手だすけを頼んだので、ことわることも出来ず、一つ仕事が片付くと早々に出て行った由であった

その後、源左同行の名が段々伝わるにつけ、京都の仏書店で本を出そうということになって、僕が同行にあって其話を伝えると〃めっそうな、この穢身のある限り、何時手がうしろに廻るようなことをするかも知れぬ身ですから、そんなことはどうぞやめて下さい〃と平身低頭してたのんだ。

僕は決して源左同行に難癖をつける気はないが、妙好人というとキレイな面ばかりを並べられて、人間放れしたように紹介されるが、そんなキレイ事ではない点にも目を向けて貰って、両面とも知った上で有難く味いたい」

とのことであった。泥中に蓮華の花が咲くように、つずれ錦に裏面があるように、我々の素地から云えば「不断煩悩」であるが、そのまんま「得涅槃」の分際に定められるよろこびがある。凡心と仏心がひとつにとろけて、凡心が転成される妙不可思議が仏願力から自然にあらわれ、煩悩のある限り無窮に転化される。「さわり多きに徳多し」と聖人が和讃でのべられる通りである。

池山先生が或夏の日に、氷をはこぶ車から水しずくがおちているのを指差されて「煩悩の氷がとけておちる音が念仏だ」とつぶやかれた。又或時「どんな立派な座敷でも便所がないと人間には住めない。臭い、穢ない便所だが、それのないところには天人でない限り安住は出来ない。煩悩あっての念仏で、煩悩ぬきの念仏は鹹味のない塩である」とも云われた。

紀州の徳本上人は癇癪持ちの殿様を感化したので有名になったが、無学な念仏者であった。彼はいつも口癖に「愚痴阿弥陀、貪欲阿弥陀、瞋恚阿弥陀、阿弥陀仏々、阿弥陀仏々」とよろこび唱えていたと伝えられる。三毒の煩悩にはなれたまわぬ大悲の消息を云いつくして充分である。

こうした念仏者の生活は、時に煩悩の氷のままが表面に出る時もあり、時には功徳の水ととけたものがあらわれるもので、その生活が臨終の一念まで続くのである。奈良の酒屋さんで念仏の縁の深かった人を最後の病床にお見舞いした。その時「こんな大病になって明日も知れぬ身でありながら、まだ損得のことが心に浮かびます、あさましい奴です、ナムアミダブツ、ナムアミダ」と話して下さった。

又或方の母堂は若い頃から仏縁が深く、家族にも聞法をすすめていられたが、老いて脳軟化症となり、現在のことがわからず遠い過去の世界だけの人となって念仏もほとんど忘れられて亡くなられた。ところが父上は家事に忙しく

して一向に聴聞しようとされなかったが、大病になられてから急に心がひらけ念仏の絶えることのない生活を続け、家中の者を臨終には集め、念仏を勧められた。こうした両親を持たれて仰言るには「私の母は機の真実を知らし、父は法の真実を見せてくれました。この両親にまもられて念仏させて貰っています」とのことであった。

ところが或人のお父上が平素非常に念仏をよろこんで、長い間病気療養の生活を続け、とうとうしまいには、体力も気力もおとろえて、頭脳の老衰があらわれ、筋のとおらぬことを口走るようになって家人をこまらせながら亡くなられた。その時、仏縁の薄い兄弟の一人が「念仏々々と云った父があんなみじめな死を遂げるのだったら、念仏もつまらん」と淋しがった由である。こうした見方をする人も世間には多いが、その人達は、立派な臨終が出来るのが仏法者のように思っているので、功利主義から見た考えである。

最近老人達がポックリさんをしきりに拝んで、ポックリ死にたいと願っている。奈良県の源信僧都ゆかりの寺にも沢山お参りして、僧都のお母さんのようにやすらかな往生を願っていると伝えられる。そうした自分勝手な考えの前に、まず自分自身が仏道を聞いて、死に様に何の用事もない、摂取不捨の御誓いのたしかさを頂かねばならない、事実私共は、業縁次第でどんな業さらしをするようになるかも知れない、それをまぬかれられないのに、調子のよいことばかりを祈念することこそ、仏陀を利用した冒瀆であると気づく人の少ないのは悲しいことである。

さて、煩悩を断じつくして涅槃のさとりを得られるとは一般仏教の定説であるが、聖人は煩悩を断じ得ない罪障の身を仏の大願の不思議なお力で消滅して下さって、功徳の水と転じて頂くところを「不断煩悩、得涅槃」と仰言るのである。煩悩を断じ得ない者が涅槃のさとりを得るとはたしかに大きなパラドックス（背理）であるが、それが自然に成就されるのである。

こうしたことは相対差別の域を脱し得ない、分別意識のみに支配される者には夢にも考えられぬことである。蓮如上人が、五帖目第五通に

大経には令諸衆生、功徳成就ととけり。されば無始已来つくりとつくる悪業煩悩を、のこるところもなく、願力不思議をもて、消滅するいわれあるがゆえに、正定聚不退のくらいに住すとなり。これによりて、煩悩を断ぜずして涅槃をうといえるはこのこころなり。この義は当流一途の所談なるものなり。他流に対してかくのごとく沙汰あるべからざるところなり。よくよくこころうべきものなり」

とねんごろに注意せられているのも、相対差別心ばかりの世ではこれを聞いて、疑ったり、謗ったりするようになるので、そこを案じられてのお文である。

ともしび

聚墨生

○

真理の一言は悪業を転じて善業となす

（教行信証・行巻）

「愛語よく回天の力あり」の道元禅師の一句は、良寛和尚が珍重し、御自身の生活の大切な鏡としていられる。

私も心に刻んで、あれか、これかと長い間探索しているうちに、人間としての愛もない私が苦心して得られるものでなく、それは仏の大悲心が言葉とあらわれたものであると気づかされた。同時に、真理の一言が悪業を転じて善業となされるのも、仏の真実心がそのまま言葉とあらわれて煩悩具足の身に働いて下さる不思議さと知らされた。

さて私にとって、実際生活の上で愛語であり、実語であり、真言と頂いているものは、南無阿弥陀仏の名号である。七十一になった本年の正月に

御名一つともしびとしておのずからひらけ行くみちみほとけのくに

と讃仰もうした。

この不思議な転化作用についてこんな実例がある。ある青年が肺疾が悪化して、絶望状態になった。これに最後まで付き添うていた祖母が篤信者であったので、その孫が不憫でならず、色々苦心した挙句、孫に「お念仏はありがたいと聞いているが、これから一緒にお念仏を唱えておくれ、その数だけのお米でお粥を作ってあげるから」と勧めると、機縁が熟していたのか、幸にすなおに孫が念仏しはじめた。幾日かが過ぎた或日「お祖母さん、僕にもよくわかったよ。色々と心配かけたなあ、これからはひとりでお念仏申すから！」と言って、心もひらけ、念仏を喜びながらやすらかに亡くなった。

こうした例は沢山あるが、お念仏を聞きながらそれが愛語であり、実語であり、仏の真実心であるとも知らずに聞き流すのは、宝の山に入りながら手を空しくして帰るにひとしいことである。

昭和五十年六月一日

○

行善の本、帰依にあり

（聖徳太子三経義疏）

救世軍の山室軍平氏が「世間の善行はバケツの水のようなものですぐなくなる。もし信仰に根ざすと、自分の胸に水道がとりつけられたように、絶えず新鮮な生命の水が湧いてくる」といわれたと聞くが、私共の持ち合せの親切心の限界と、神の聖愛に直結する信仰から湧き出る善行の無尽さを教えられる。

親鸞聖人は「聖道の慈悲というはものをあわれみはぐくむをいう。然れどもおもうがごとくたすけとぐることきわめてありがたし、この慈悲始終なし」とも、「小慈小悲もなき身にて有情利益はおもうまじ」と、仰言って、御自身の力の限界をよく知られて「無慚無愧のこの身にて、まことのこころはなけれども弥陀の廻向の御名なれば功徳は十方にみちたまう」と、光も熱もない月も、太陽に照らされて、その光が返照して四方を照らすに等しく、自利のまんまが利他、自信がそのまま教入信と自然に恵まれるのである。

それにつけても「行善の本、帰依にあり」との聖徳太子の仰せが、宗教の如何をこえていよいよ渇仰せられる。その太子は、横暴をきわめる閥族の蘇我馬子とお若い時から国政をともに執られるにあたり、どんなにか御難渋せられたことであろうか。若し太子が武器を執られて相手を亡きものにすれば、馬子の子入鹿が恨みをもって仇とねらうであろう、そこには恨みから恨みの修羅場になるし、かと云ってそのまま傍観したのでは横暴が増すばかりであろう。こうした中で御自身のおこころ一つを持て余されるにつけ、ある時は太子が御内仏の夢殿にこもられて数日も出られなかったと伝えられる。内外の障りに直面せられては御自身の平常心のこわれるにつけ、いよいよ無限の仏心の大悲を仰がれて、幾山河を越えられたことであろう。太子の常持語の「世間虚仮、唯仏是真」も、仏の真実心一つで虚仮の世を処して行かれたおよろこびと慚愧のお声であった。

昭和五〇年七月二十日

○

親鸞は弟子一人ももたず候

（歎異抄六章）

弟子一人も持たずとは、何とすっきりとした聖人の御心境であろうか。九十年の御生涯を、如来の教法を我も信じ人にも教えきかしめることに専念せられ、有縁の人々から恩師と慕われる聖人のお言葉だから驚かされる。

これは単なる謙遜でなく、小慈小悲もない身と信知せられる聖人にしてみれば、御自身は飽くまでも仏に救われる

身であって、人を救うなどとはもっての外で、われひとともに仏力を仰ぐばかりとの信念を持たれている。

この聖人の御耳に、わが弟子、ひとの弟子というもめごとが、あちらこちらから聞こえるにつけ、これを非常にいたみ悲しまれて、御自身の日頃の確信のままをのべられたのである。

私はかって精神科の杉田教授から、愛情に飢えた子は物をつかまえるようになり、やがてそれがもとで盗癖がでがちである。それが満たされると自然になおる、と教えられた。弟子争いをしてたがいに党派を組み、勢力をきそうのは、仏の大慈大悲心に十分に満たされていないところから人や党をつかまえて、それを力にし、たのみにするからである。

仏の強縁に結ばれることのたしかさ、時の流れに消されず、所の移転にさえられず、また何ものにも砕かれないたのもしさ！聖人はそこにあって、たがいに御同朋、御同行とかしずかれて、離合を因縁にまかし、弟子一人もたずという人生手ばなしの妙境に悠々自適していられる尊容を拝するのである。

昭和五十年九月七日

波岡茂輝氏歌集

我が如き思ひあがれるさかしらをたすけたまはむ
弘誓なりしか

をさな児の母のふところにあるがごとみ仏にただ
にまかすべかりけり

日輪はたださんさんと輝けり樹にこそ暗き蔭はあ
りけれ

源の濁れる川もひたすらに海にそそぎておのづか
ら澄む

限りなく濁れる水もきよめそそぐ水絶えざればわ
れはやすけし

何事か成し得べしとの夢さめてあやまり果てしあ
とに道あり

うつし世によるべきもののなしと思へど藁だにつ
かむ溺れたる身の

あとがき

ことしは足早やに寒さがきて、きびしいとの予報に日本の前途も思いあわせられる視界零という国会が議事堂で空転して久しい。街には公害と物価高と就職難そして倒産、汚職、自殺等々の声がしきりである。

この秋、大地にしっかりと根を下した樹木のように、一人一人が絶対の地盤に樹たないと、昨日は東、今日は西の漂流に終らねばならぬ。家屋を支えるには四本の大黒柱が大切ときく、大暴風雨の海で船長の確信ある舵取りに船客は安堵する。聖徳太子の「篤く三宝を敬え」との御勧めがいよいよ仰がれるこの頃である。

さて、近角先生の飯山市での教行信証の御講話を続いて頂いたが、今月で終りとなった。御味読下さって祖聖の思召しを唯一の心のともしびと頂いて共々に人生航路をたどりたいものである。

福島先生は御不調の中に静かにおすごしで、今回は旧著「読書と教養」の中から頂いた。先生が祖聖の御心にふれ、生涯お導きをうけられたおもむきがうかがえる貴重なものである。

高千穂師は御母堂の三十三回忌を迎えられて、いよいよ慈母の洪恩を渇仰されたその一端を私共にもお頒ち頂いた次第である。

木村さんは枯草の身に法灯を掲げられて有縁の人々にその余光を頒っていられる、本年の一道会にお会い出来たらなあとひそかに念じている。

良寛さんの辞世の句に

裏を見せ　表を見せて　散る紅葉

とあるが、不断煩悩、得涅槃の妙味をズバリと言い当てられて十分である。「地獄行き」のそのまんまが「往生浄土」そこに慚愧あり、そこに感謝あり、そこに讃歎ありである。

今度、京都の百華苑の清水さんの御骨折りで、「心光照護の下に」の拙著を出版して下さることになり、今日校正を終った次第である。七十二が近い今日、信の旅の一里塚にさせて頂けたことは感謝にたえない。

御名ひとつともしびとしておのずから
ひらけ行くみち、みほとけのくに

聚墨生

・御案内・

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一例会例会。

市バス、新郊通り一丁目下車、東へ三筋目、左入ル二軒目。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

名鉄、呼続下車。徒歩二十分。

○毎月二十四日、午前午后教西寺法話会。

昭和区小桜町二ノ四番地。

市バス、御器所通り下車、又ハ、北山下車。

○

例会の第三日曜には、信仰座談会とさせて頂いて、一方交通でなく、皆様の信味もお聞かせ願うようにした。お含み下さい。

定価　半年　五〇〇円（送共）
　　一年　一〇〇〇円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄

発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社

振替口座　名古屋一〇四七〇番

郵便番号四五七

慈光　第二十七巻　第十一号　昭和五十年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月十三日第三種郵便物認可